

3 マニラールヴィックの統合問題

マニラろう学校再訪

今回の調査で最も楽しみにしていたのは、1999年の調査以来で追いかけてきた子どもたちと久しぶりに再会することだ。当時1年生であった彼らは、今7年生になっている。思春期の真っ只中だ。そして教育の大きな変革の中で、マニラろう学校はどのように変わってきたのだろうか（あるいは変わらずにいるのだろうか）？そんな中、ショッキングな記事に出会った。「マニラろう学校とアルヴィック難聴学校の統合！」。ろう学校と難聴学校が統合するための作業が進行中とのこと。マニラろう学校がなくなってしまうのであろうか？

1999年の訪問時、マニラろう学校でも、人工内耳を装用する子どもたち（以下、C I児とする）が増えつつあった。手話を基調とした教育活動の中にも、聴覚を活用した活動や取り組みも限定的であるが、少しずつ広がっていた（そのあたりの状況については、先の調査報告にも紹介した；鳥越・クリスターソン、2003）。それからC I児の数は増え続け、また現在はスウェーデンの教育改革の嵐の真っ只中にある。まずは、ホームページでマニラろう学校の最近の取り組みについて情報収集した。生徒数（2004-2005）は150人。うち補聴器使用者は60人、C I児は25人とある。半数以上がいわゆる「難聴児」だ。ただこの時点で、マニラろう学校には、「ろう（手話）」クラスと「聴覚（スピーチ）」クラスが別々に設けられていない。ヴェナーろう学校やクリスティーナろう学校では、手話クラスと聴覚クラスが設けられていたことは先の稿で紹介した。当然のことながら、手話に関する記述は多い。手話バイリンガリズムはゆるぎないとの印象を受ける。ただ注目すべきところは、C I児や難聴児への対応を模索しているところだろう。模索の様子が記述の随所に見られる。教育活動の説明の中に「様々なニーズ」や「柔軟な対応」ということばがよく出てくる。難聴児への具体的な対応として、聴覚補償の取り組みやC Iチーム（医療機関）との協働も強調されている。教室では音声スウェーデン語も含めて指導するとある。教室の中で手話のみが使われ、スピーチの使用が抑制されていた、当時のエピソードは、先の本にも紹介したが、現在そのあたりはどうなっているのだろうか？

同ホームページでは、聴覚の活用に関する取り組みの経緯について紹介されていた。1999年に政府の教育委員会から、手話による指導に加えて、補聴技術などにより聴覚活用の可能性のある生徒については音声スウェーデン語による指導も行うべきとの文書が出された。これを契機にマニラろう学校も指導方法が変わってきたとある。また難聴児への独自の取り組みも掲載されていた。9年生の手話の授業で、「難聴」をテーマに取りあげたとある。「難聴者は語る」（成人の難聴者が自分の人生を語るビデオ教材）を見たり、難聴青年の協力を得て、難聴であることの意味について講演してもらったりしたこと。ろう児にとって、成人ろう者との関わりが重要であるとの議論は以前からなされていたが、今、難聴児にとって、成人難聴者との関わりが必要と説かれている。おそらく難聴児が自身のアイデンティティを確立し、肯定的な自己概念を形成するためには、ろう者でなく難聴者が必要との考えなのであろう。いずれC I児にとって、成人の人工内耳装用者との関わりが必要との議論になるのであろうか？以上、予習を終え、いよいよマニラろう学校を訪問する。

学校に到着後、早速7年生のクラスに案内される。クラスに行くと、紛れもなく、あの1年生のクラスの面々だった。1時間目の授業は、歴史。難聴の男性の先生がメインの指導。ろうの先生がサブ。生徒は14人。以前に訪問したときから何人かの生徒は外の学校へ出て、何人かの生徒が新しく加わったそうだ。新しく加わった生徒の中にイラクからやって来た男子生徒もいる。先生が生徒にプリント

を配る。歴史に関する20問ほどの問題が書かれている。問題は、例えば、「日本は1905年に戦争をしたが、どこの国とか？」のような問題（正解はもちろん「ロシア」）。これを生徒自身が本やインターネットなどで調べて、問題を解く。担当の先生によると、このように自分で調べる力を身につけさせたいとのこと。彼がこれまで作った歴史に関する教材や資料等を示し、どんなふうに授業を進めてきたかを説明してくれた。生徒たちは、教科書や副読本を見たり、分厚い歴史事典のようなものを見たりして調べている。1人で座って黙々と調べる生徒、2人で仲良く調べる生徒、またグループになって（手話で）ぺちゃくちゃ話しながら調べる生徒などまちまち。2人の先生が、それぞれのグループを巡ったり、個別に指導したりしている。生徒たちは手話だけで話している。難聴の生徒の声もときどき聞こえるが、でもまさに「ろうの世界」であった。

次の時間は、スウェーデン語の授業。いくつかのグループに分かれて授業を進める。6人ほどのグループを聴者の先生が担当。となりの部屋では、ろうの先生が生徒に対してコンピュータを使って作文の指導をしていた。私は聴の先生の授業を見学する。テーマは形容詞。担任の先生はしゃべりながら手話（時には声なしの手話）で授業を進めている。生徒は声を使ったり、手話だけで話したり、声だけで話したり（おそらく難聴の生徒だけを集めているのだろう）。はじめに一斉授業の形式で形容詞についてあらかじめの説明を行い、その後、各自がドリルで形容詞の変化形の学習を進める（形容詞の原級、比較級、最上級を書いている）。わからないときに先生にたずねるが、基本的には各自で勉強をしている。ただ歴史の授業のときは大きく違う。まさに声の飛び交う授業だった。

次の授業は、フランス語の授業。聴者の先生が2人の生徒に授業を行う。フランス語は選択科目として今年から授業に入っているそうだ。生徒にとってフランス語は4番目（スウェーデン手話、スウェーデン語、そして英語の次）の言語。すでに基本的な文法や語彙の学習は終えているとのこと。今日は、フランス語の文章をスウェーデン語に翻訳するというのが課題。生徒たちは、スウェーデン語一仏語辞典で単語を調べながら文章を作っている。翻訳を通してフランス語を学ぶのだ。はじめは、音声で授業をやっていたそうだが、難聴の生徒にとっても先生の話すフランス語がなかなか聞き取れない。難聴であっても、外国語を、聴覚を通して学ぶことは至難の業であるとのこと。このことが親たちになかなか理解されない。自分たちの子どもたちは、何とか聴覚を通してスウェーデン語の学習ができる。それなのに外国語の学習には聴覚が有効でない（スピーチを主体にした授業ができない）。そのことを親はなかなか受け入れられないとのこと。英語の授業でも似た状況らしい。また多くの難聴の生徒は、（聴兎と同じように）9年生での卒業を目指している（一般にろう学校は、通常の学校より1年プラスされ、10年制であるが、9年で卒業してもよい）ので、これからの2年間が大変とのこと。9年生の終わりにはナショナルテストを受けなくてははいけない。オレブリューには難聴生徒のためのギムナジウム（高等学校）があるが、ここに入るにも、ナショナルテストに合格してはいけない。今5人の難聴の生徒がそれをめざしている。

授業見学の後、校長先生にインタビューした。校長先生はろう学校の教師歴20年のベテランだ。校長になったのは6年前から。多くのC I児がマニラろう学校のプレスクールに入学した当時は、デフパワーが強く、学校でC I児を受け入れる雰囲気になかったそうだ。教師たちとディスカッションを重ねた。そのクラスが今の7年生だ。C I児を受け入れるようになって学校の雰囲気も少しずつ変わってきた。以前は教室でスピーチを使うことは許されなかった。難聴児が声を使っても、先生はそれを認めなかった。それが今少しずつ変わってきた。声を使うことが日常になってきた。今またマニラろう学校は大きく変わろうとしている。この秋の学期（2005年）から「聴覚クラス」ができる。そこでは、もちろん手話も使うが、主な指導は音声スウェーデン語で行われるとのこと。これに関しても多くの議論はあったが、先生たちは少しずつ「現実」を受け入れ始めている。

インテグレーションをしている生徒に対してのサポートについても話をうかがった。今インテグレーション生徒に対して、3日間の手話講習がろう学校で行われている。プログラムの内容は手話の指導を行ったり、難聴に関してグループで話し合いをしたり、またろう学校の生徒と授業を一緒に受けたりなど。今年度は、3年生と4年生で行っているが、まだ試行的ですべての学年で行っているわけではない。来年度も同様に実施するかどうかこれから検討すること。なかなか生徒集めが難しいらしい。ろう学校が独自にインテグレーション生徒について情報を把握するのは難しい。今回は親同士のネットワークを利用して、プログラムの参加者を集めたとのこと。また毎年何人かインテグレーションに適応できなくて、マニラろう学校に転校して来る生徒もいる。彼らは通常学校の大きな集団についていけない。学習や心理面でも様々な問題を抱えてやって来るそうだ。

最後に、学力の問題についてうかがった。現実には、卒業生のほぼ40%しかナショナルテストに合格できていない。その原因や対応について、話しあっている。マニラろう学校の場合、昨年度の卒業者は10人で、うち半分が不合格。不合格した生徒のバックグラウンドについて調べてみると、4人が外国からの移民の子弟。例えば、7年生や8年生になってろう学校にやってくる。それ以前はほとんど学校教育を受けていない。そのような生徒が数年でナショナルテストに合格できるはずはない。また1人は知的な遅れがあった。だからそれらを考慮すると、結果はそれほど悪くないと考えている。現在、数字だけが一人歩きしている。それがむしろ大きな問題だとのこと。

校長先生とのインタビューの後、心理士のグニラ・トゥーレソン＝モライスさん（2003年の本の中にも紹介した）にお会いして、話をうかがった。彼女は、教師とは違う立場で、マニラろう学校の変化を見つめてきた。まずここ5年間の変化についてうかがった。大きな成果は、教師がC Iやスピーチを肯定的に見ることができるようになってきたとのこと。難聴児やC I児がマニラろう学校に多く来るようになった。もちろん手話がベースで、そのような子どもたちも、手話をするとき口を動かさずにやっている。手話がしっかりと根付いている。でも子どもたちは状況によっては自然にスピーチも使う。時には両方同時に使うこともある。スウェーデンでは、現在も、理論的（あるいはイデオロギ一的）にはスウェーデン語対応手話は否定されているが、現実にはそれなりに機能（役割）を持っている。そういう状況を見てきて教師の態度が徐々に変わってきた。C I児もスピーチも受けとめられるようになってきた。それがここ数年の大きな変化だろうとのこと。以前は口を使わずに手話だけでやってきた。その分、ある意味、教師も親（特に聴者）も非常にストレスフルだった。「正しい」手話をしなくてはならないと。また一方でろう児や難聴児に対する診断がしっかりしてきた。手話の環境があっても、C Iを装用しても、なかなか言語が習得できない、やはり課題が残る子どもたちがいる。これまでは「言語」の問題と大まかにしか考えられてこなかったが、どこに原因があるのか、診断がなされるようになってきた。いわゆる軽度発達障害の問題だ。それに応じた対応も可能になってきた。またこれからマニラろう学校の生徒はますます重度化していくのではと思っている。シグトゥーナのろう学校が閉鎖された。そこではこれまで行動的な問題を持ったろう児が通っていたが、国が通常のろう学校で対応可能と判断して、閉鎖した。そういう子どもたちもマニラろう学校に通うようになってきた。また中等度の知的障害であれば、（重複障害児が通うオスバッカ学校でなく）地域のろう学校に入るようになってきた。親もそれを望む。これからもマニラろう学校は変わりつづけるだろうと、グニラさんは語っていた。

マニラろう学校（あるいはスウェーデンのろう学校）は、これまでは比較的等質な集団で、手話による教育がなされてきた。現在、生徒の個別のニーズが多様になってきた。家族の思いも様々だ。「手話によるバイリンガル教育！」だけでは、なかなか立ち行かなくなっている。かと言って、個のニー

ズだけを見ていけば、集団がバラバラになってしまう、共通のことばも存在し得ない。等質性と個別ニーズとのバランスをどうとるか、これが、今マニラろう学校が模索している課題なのだろう。折り合える解決策はあるのだろうか？そんなことを考えながら、マニラろう学校を後にした。

アルヴィック学校とは？

アルヴィック学校 (Alvikskolan) は、地下鉄のアルヴィック駅から歩いて5分ほど、閑静な住宅街にある。生徒数900人ほどの地域の基礎（小学校と中学校をあわせた）学校で、その中に難聴「学校」がある。「難聴」学校と書いたが、聴児の通う学校とは校舎が違う、組織が違う、また聴児と交流があるわけではない（日本のようにしょっちゅう交流学級に行ったりしない）。まさに「難聴学校」と言ったほうがいい（この点、先の稿で紹介したカナボックス学校と状況は同じだ）。難聴生徒が120人ほど在籍している。ろう学校並みの生徒数だ。この学校は地域（コミュニティ）の学校だが、難聴生徒はストックホルム地域全域から来る（まさに日本のセンター校方式の難聴学級）。ストックホルム市域の難聴学校はアルヴィックだけ。難聴学校の校舎は2つ、低学年と高学年に分かれている。1つは建てられたばかりの新しい棟。低学年（プレスクールから3年生まで）がこの棟で学習する。高学年は少し離れた棟。できたときは最新の設備だったが今は少し古くなっているとのこと。

この学校の副校長（難聴部門のトップ）がグニラ・クリスターソンさんだ。グニラ・クリスターソンさんは、ご存知だろうか？以前は、障害教育研究所で教材開発の仕事をしていた。「アダムスブック」の著者と言ったらわかるだろうか？日本にも1度お呼びし、ろう学校の先生方と手話教材の制作についてのワークショップを開いたことがある。スウェーデンのバイリンガルろう教育の推進に少なからず貢献した、その彼女が、今はアルヴィック学校の副校長だ。彼女とは、私が初めてスウェーデンを訪問したときからの付き合いだ。今回のスウェーデン訪問で、是非ともアルヴィックの取り組みも見て欲しいと招待された。

グニラさんに案内され、校内を見学する。新しい棟はとても明るい雰囲気。テクノロジーが駆使され、音環境の整備もきちんとなされている。デザインも今風。グニラさんは、この学校に移ってまだ1年ほど。今この学校で手話環境の整備（バイリンガル教育）に取り組んでいるとのこと。彼女は何度も、難聴児やC I児にとっても手話環境が必要との考えを話される。難聴児やC I児もバイリンガルをめざすべき。バイリンガルはろう児だけの教育目標でないのだ。2つの言語が十分育った段階で、例えば成人になって、あるいは思春期の時期に、どちらかを選択すればいい。また難聴児のアイデンティティの獲得も重要な課題だと話す。自分がろう者とも聴者とも自信を持って関わることができ、自分を表現できることが大切。成人の難聴者たちは、自分たちが聴者の中で孤立していた体験をよく語っている。最近の難聴協会の年次報告書の中でも、難聴児にとっても手話が必要であることが主張され始めている（この件については次稿で扱う予定だ）。

まず小学2年生のクラスを見学した。このクラスが学校の中で、今最も積極的に手話の活用を進めているそうだ。担当教師ハンナは聴者。生徒は8人。算数の時間。先生が子どもたちと絵本（自分たちで作ったもの）をもとに話をしている。どうも海賊の話をもとに（教室の一角には海賊に関しての本がたくさん並べてあった）自分たちで算数の問題をとり入れた物語を作ったらしい。それが本になっていて、その本をもとに今算数の勉強をしているのだ。本の中にたくさん算数の問題が入っている。算数の問題は簡単な足し算（1桁から2桁くらい）。2年生レベルにしては易しいのではと聞くと、グニラさんは、算数には2つの勉強があって、1つは個別的に自分のペースでドリルのような教材で学習を行う。それで算数に関する知識や技能を積み上げていく。もう1つは集団の中で、話し合いを通して学ぶ。算数の言葉で語ったり、算数的な考え方に自覚的になったり、算数の勉強で得た知識を生活の中で生きた知識にする。今行っているのは後者の授業とのこと。先生はしゃべりながらの手話。生

徒たちは、しゃべりながら手話をしたり、しゃべるだけであったり。あらかた話が終わると、次に 1 人ずつ問題の文を読んでいく。読み方は様々。先生はしゃべりながら手話をしてもいいし、もし難しければスピーチだけでもいいよと言う。何人かの子どもはしゃべりながらの手話、何人かの子どもはスピーチのみ。全員が読み終わると、今度はグループに分かれ、問題の答えを考える。グループ分けの方法も子どもたちで話し合っただけで決める。3つのグループになる。子ども同士の話し合いも手話を使ったり、スピーチだけだったり。グニラさんによると、1人の子どもだけが答えを考え、他の子どもたちがそれに従うというパターンがよく見うけられるが、この学級は対話を通して共同で解答を考えているとのこと。また子どもたちはうまくコミュニケーションの方法を使い分けている。授業としては、最後に各グループで話し合ったことをみんなの前で発表する予定だったが、解答を OHP シートに書き始めたところで時間切れとなる。

グニラさんに子どもたちの手話学習に関して話をうかがう。週に 3 日ろうの先生が来る。その先生は手話のみで授業を行う。その先生に対してはもちろん子どもたちも手話だけで話す。ろうの先生は手話の授業だけでなく、ときにはスウェーデン語や算数の授業にも参加する。バイリンガル環境を整えるにはキーパーソンが必要。ろうの人がその役割を担う。なかなか聴の先生がその役割を担えない。生徒の手話環境を整える意味で、マニラろう学校生徒と交流も行っているようだ。1年間に 4 回程度。同じ学年の子どもたちが互いの学校に行ったり来たり。アルヴィック学校にいる健聴の生徒は残念ながら手話を学習していないとのこと。聴の生徒との交流も必要との認識はあるが、まだできていない。難聴の生徒が高学年になると、聴者とうまくやっていけるのか心配になる生徒もいるようだ。聴者と肯定的な関わりを体験していることは重要。やり方としては、あまり大きな集団に入っていくのではなく、同じくらいの集団同士で交流をすることが重要と考えている。また学年の途中でアルヴィックにやってくる生徒もいる。大きな集団の中でなかなかついていけなかった生徒とのこと。このあたりはろう学校と状況が同じなのだろう。

難聴学校でのバイリンガル教育への取り組みに対しての教師や親の反応について聞く。教師は概して肯定的とのこと。グニラさんによると、この学校の教師の意欲や実践力のレベルは高いが、ただこれまで十分に手話やろう者についての知識を持っていなかった（学習の機会がなかった）。親に関しては、半分は手話に肯定的。もう半分は手話をやるとスピーチがおろそかになるのではとの心配を持っているようだ。ただこれは手話や言語獲得に関しての十分な知識や情報を与えられていないから。現在、様々な機会を利用して、親に今の取り組みについて情報を提供しつつあるとのこと。

これまでスウェーデンで、あるいはバイリンガルろう教育の中で否定されてきた、「話しながら手話をする」ことに関して、グニラさんの意見を聞いた。彼女は教室で子どもたちの様子を見ていて、話しながら手話をするのは自然だと感じるようになったとのこと。彼ら（難聴児）なりのバイリンガルへの道がある（第一言語がスウェーデン語、第二言語としてスウェーデン手話）。それはろう児のバイリンガルへの道と異なる。ろうの場合、口話と手話の併用は好ましくないが、難聴児の場合は有効だと考えている。ただ難聴児もバイリンガルとなるためには、きちんとした手話の環境も必要。先ほど述べたキーパーソンと特別な学習環境が必要だ。週に数時間だけの手話の学習では当然足りないとの認識している。また今、多くのろう学校で「聴覚クラス」の取り組みが増えつつあるが、そこではスピーチが主で、手話は単に学習するだけに終わっている。学んだ手話が生活や学習活動の中に十分生かされていない（バイリンガルになっていない）のではないかと危惧している。グニラさんは、この教室の中にまさに生きたバイリンガル環境を作ろうとしているのだ。

昼からは 2 年生の音楽の授業を見学した。音楽の先生が生徒と輪を作って座り、リズム的な手遊び行っていた。その後、そのリズムに歌を乗せようとする。また歌に合わせて身体を動かしたり、太鼓で合図をしたりする活動を行った。どうも先生の意図と子どもの行動がしっくり来ていない印象を

受ける。先生はほとんど手話を使わず、声だけで指示をだし、それで子どもたちに十分意図が伝わっていない。グニラさんが見かねて、途中から急遽、手話通訳を行った。ただ手話通訳がついても、生徒みんながきちんと見える位置で教師が話さないと（要するに手話通訳を意識した授業をしないと）、手話通訳もなかなかうまく機能しない。子どもたちも必ずしも手話を見ていない。後で聞くと、その音楽の先生はまだ手話や聴覚障害についての知識があまりないとのこと。まだまだ教師の間でもこのプロジェクトに温度差がある。教師だけでなく、生徒にとっても、家族にとってもだ。取り組みはまだ始まったばかりとの印象を受けた。

マニラとアルヴィックの学校統合問題

発端は、2003年4月のこと。全国ろう児親の会(DHB)東部支部と人工内耳装用児親の会(Barnplantorna)東部支部(いずれもストックホルム地域を中心とする支部)の連名による意見書が特別教育局(SPM)とストックホルム市教育行政局に提出された。内容の概略は以下の通りである(ホームページから抜粋する)。

背景

DHB(親の会)東部支部が2002/2003の活動プランとしてマニラろう学校とアルヴィック難聴学校の統合を打ち出した。2003年3月3日にDHBはマニラろう学校の校長、アルヴィック学校の副校長、ストックホルム市の教育行政担当者を招集し会合を持った。この意見書はその会議から出た結論である。

なぜ学校統合が必要か？

- ・ 多くの子どもが手話とスピーチの両者での指導を必要としている。特にC I児にとってはそうだ。いまや70~80%のろう児はC Iを装用している。
- ・ 難聴児もC I児も多様なニーズを持つ。それに対応するためには学校が変わる必要がある。
- ・ マニラろう学校では音声言語(スピーチ)による指導をしていない。
- ・ アルヴィック学校の教師は、手話に関する知識も態度も十分でない。
- ・ 手話環境はろう学校にとって不可欠。ただ親は難聴児やC I児を別の学校に入れたがっている。その結果、ろう学校では生徒数が減少傾向にある。学校統合をすることによって、手話環境を確保することが可能。
- ・ ろう学校の中でマニラとオスターバンクスのみが、手話クラスだけで、聴覚クラスを持たない。統合によって、他のろう学校同様、手話クラスと聴覚クラスを持つべきだ。
- ・ 統合によって次の子どもたちへの対応可能になる:手話環境を必要とするろう児、音声環境を必要とする難聴児とC I児、地域の学校に通う難聴児とC I児。
- ・ ハビリテーション計画を作成し、一貫したサポートが可能となる。特にC I児は音声語の発達には様々なサポートが必要。C I児にとって、音声環境と手話環境の両方が必要だ。統合によってこそ可能になる。

このような親たちの思いに押され、まさに統合に向けて、両校が動き始めている。その動きを常にオープンにし、関係者に共有できるように、マニラろう学校、アルヴィック難聴学校と共同でHPが開設された。統合へ向けての取り組みやワーキンググループの会議の内容が逐次そのHPで報告されている。また関係者のレファレンスグループが作られ、グループごとに意見聴取が行われている。グループは教師、親、関係団体(成人ろう者や難聴者の団体)、それに生徒だ。

統合問題の議論は、結局、それぞれの学校が抱えている課題と向き合うことになる。この会議の報

告を眺めていると、両校の、あるいはスウェーデンのろう児、難聴児を取り巻く「現実」を垣間見ることが出来る。例えば、学校がどんなリソースを持ち、何が足りないか、どんな生徒が今在籍しているのか、生徒数の今後の予想、親たちがそれぞれの学校にどんな期待をし、また不満を持っているかなどだ。2004年11月にワーキンググループの最終的な報告書が提出されている。以下に概略を紹介する（少々長いが、スウェーデンのろう教育の現状と課題を見るうえに有用だろう）。

概要

2004年1月22日に行政は以下の指令を出した。すなわちSPMとブロンマ行政区の委員会の共同作業でアルヴィックとマニラの共同事業に対しての前提条件と帰結について調査すること。また委員会は、すべての関係者、例えば生徒、親、教師及び関連団体の見解を取り込み、まだそのプロセスに関与させることを特に求めた。この調査によって、2つの学校の使命、生徒数の予想、ニーズ分析、ろう、難聴、C I児のニーズおよび様々な可能性と代案、共同作業や統合などについて検討された。さらに、今後取り組む必要のある問題点について示されている。

案件の準備

調査のために2人の調査員が任命された。両学校の親、教職員、生徒、関係団体との情報提供の会が実施され、同時にレファレンスグループへの参加の可能性が問われた。3つのレファレンスグループ（親と生徒、関連団体、教職員）が作業に加わった。調査員とレファレンスグループがそれぞれ3回会合を持った。調査員は、引き続きチーフグループ（マニラ学校長、アルヴィック学校長、アルヴィック学校難聴部門副校長）と会合を持っている。親／生徒レファレンスグループはそれぞれの学校ごとに5人（親3人、生徒2人）の代表者および特別プレスクールの2名の親、インテグレーションプレスクールの1名の親からなっていた。関係団体レファレンスグループは、DHB 東部支部、SDF（聾者協会）、HRF（難聴者協会）などが参加した。情報、資料、会議メモ、それぞれのレファレンスグループの見解等はHPに掲示された。また両学校の保護者に対して、学校統合に関してのアンケート調査を行った。

背景

DHB 東部支部とBarnplantorna 東部支部が2003年4月にSPMと教育行政に対してアルヴィック学校難聴児クラスとマニラろう学校の統合に関する要望書を提出した。ろう児の80%がC I装用をするようになり、これらC I児は音声言語と手話言語の両者の発達を必要としている。両学校ともこのようなニーズに対応した変化、展開が求められていることを認識している。

調査結果

1、マニラろう学校について

使命

10年制の特別学校。2言語環境。ろう児のためのカリキュラムを実施。ろうの両親の子どもやろう児の兄弟（いずれも聴児）に対する手話の講習も行っている。難聴のある生徒たちは、コミュニケーションでは手話を使用するが、学習ではより音声スウェーデン語で行う可能性を持っている。政府はこのような生徒に対して、より音声スウェーデン語の使用が必要であると指摘している。

事業とその枠組み

様々な指導のための生徒グループを作っている。4人から8人のグループが多い。スウェーデン語や数学などでプロジェクト研究を実施。生徒数と職員数の割合は3：1。生徒のニーズに応じた柔軟な対応が可能。コミュニケーションで手話を使用するが、同時に補聴技術の支援によって口話での指導が可能な生徒には音声スウェーデン語で指導を行っている。

現在の生徒数と組織

2004 年秋学期の生徒数は 150 人。うち C I 児 28 人，補聴器使用者 80 人，補聴器を使用せず，主に手話のみ 42 人。

2, アルヴィック学校

使命

地域（コミュニオン）が運営する学校。難聴クラスはプレスクールから 9 年生まで。コミュニオンを越えて生徒を受け入れている。Lpo94（通常のカリキュラム）にしたがって教育。聴覚クラスに就学するかどうかは地域の教育委員会が決定。

事業とその枠組み

4 人から 8 人のグループで生徒を指導。指導言語は，音声スウェーデン語。必要に応じて，様々な程度に手話の一部の要素が使用される。スピーチ（発音）指導は，2×40 分/週。手話は必須科目。健聴生徒や他の難聴生徒との交流は今のところない。聴覚障害の理解，難聴アイデンティティ形成，自己意識の育成のため，継続した取り組みを行っている。

現在の生徒数と組織

アルビックの全生徒数（2004 年秋学期）は 915 名。うち難聴クラスは 139 名（うち 4 名が C I 装用，他は通常の補聴器）。

3, 生徒数の将来の予想

マニラは 150 人。ほぼ変化なし。アルヴィックは 2004 年春 136 人，2004 年秋 139 人と漸増傾向。ただし県外からの流入は予測できない。放課後の課外活動は，アルヴィックが 38%，マニラが 42% の生徒が参加。両校とも生徒のおよそ 3% が sarskolan (知的障害児のプログラム) のカリキュラムにしたがっている。

4, 学校の選択：様々な選択肢

- ・ 東部地区：マニラろう学校 150 人，アルヴィック 139 人，Parkskolan（ウプサラコミュニオンの聴覚クラス）16 人，Nya Broskolan（ストックホルムの手話フリースクール）20 人。
- ・ 北部地区：クリスティーナろう学校 77 人，クリスティーナとヘノサンドコミュニオンとの共同事業で 9 人の生徒がコミュニオン経由でクリスティーナの聴覚クラスに所属（+ 正規の生徒 22 人），Solanderskolan（Pitea にあるコミュニオンの基礎学校に聴覚クラス）28 人。
- ・ 中部地域：ビルジッタろう学校 173 人（手話クラスと聴覚クラス），コミュニオンの基礎学校にいくつか聴覚グループがある。
- ・ 西部地域：ヴェナーろう学校 68 人，カナボックス学校（ヨテボリコミュニオンの難聴学校，聴覚クラス，ろうクラス，言語障害クラス，sarskolan がある）130 人，Saderskolan（ファルケンベリコミュニオンの聴覚クラス）13 人，その他，コミュニオンの基礎学校に聴覚グループ。
- ・ 南部地区：オスターバンクスろう学校 73 人，Silviaskolan（ヘッセルホルムにコミュニオンの聴覚クラス）55 人。

5, ニーズ分析

コミュニケーションできることは社会生活の基盤。難聴児の中には，指導を音声語で受けるにしても，コミュニケーションのために手話のニーズを持つものがある。機能的な障害は早期には発見困難。年齢が上がるにしたがって，言語コミュニケーションの役割が大きくなり，また抽象的なレベルの指導が増えるにしたがって，機能的な障害が明らかになる。プレスクールの親（レファレンスグループ）は，学校選択がいかにあるとも，手話の必要性を同意している。

手話

手話は独自の文法を持つ。1981 年スウェーデンの国会で手話は言語と規定。自然な手話環境が，ろう，難聴，あらゆる年齢，様々なレベルのグループで，互いのコミュニケーションを可能にする。

それが聴児と同様の発達を促し、また肯定的なアイデンティティの発達を可能にする。

二言語

多くのろう児にとって手話は第一言語、スウェーデン語は第二言語（主として書記形態）。それぞれ異なった機能を持つ。手話の機能は、直接のコミュニケーション。それを通して、周りの世界の知識を得、また社会的、認知的、情緒的に発達する。スウェーデン語は社会に完全参加するために必要。それを通して、自ら知識を得たり、情報を得たりすることが必要。機能的なバイリンガリズムとは、周りとのコミュニケーションするため、新しい知識を獲得するため、状況に影響を及ぼすため、そして自身のパーソナリティを発達させるために、両言語を利用できることを意味する。多くの難聴児にとって、音声スウェーデン語が第一言語。手話は第二言語になる。難聴児が手話を学び、同様の発達をするためには、継続的、持続的な手話環境を必要としている。現在手話の状況について政府が調査を行っている。

ろう、難聴、C I 生徒のニーズ

- ・知識を運ぶ言語としての手話

ろう：第一言語

難聴、C I：一部は第一言語。他は第二言語。時間とともに変化の可能性

- ・知識を運ぶ言語としてのスピーチ

ろう：能力に応じて。スピーチ、音、読話についての知識や意識は必要

難聴：多くの難聴児にとって知識を運ぶ。ニーズに応じてスピーチの発達を支援。スピーチ・発音・読話についての知識や意識は必要

C I：一部のC I 児にとって知識を運ぶ。スピーチの発達を支援。スピーチ、発音、読話についての知識や意識は必要。多くのC I 児は両耳装用。将来については不明な点が多い。

- ・知識を運ぶ言語としてのスウェーデン語

ろう：書記形式

難聴、C I：音声及び書記形式。時間とともに変化の可能性。

- ・柔軟なグループ形成

知識を運ぶ言語としてスピーチと手話の両者のニーズを持つ生徒は、両言語のグループに加わる必要性を持つ。時に授業の初めだけ、時にある教科、時に補聴技術レベルが満足すべき状況にならないう場合、あるいは生徒の聴覚レベルが変化した場合など。

- ・多くのろう／難聴の同年齢の友達：必要！

- ・同年齢の聴の友達：必要！でも、どのように、いつ、どこで？

- ・適切な環境

ろう：十分な明るさ、互いによく見えるように配置

難聴、C I：よい聴覚環境と十分に機能している技術。十分な明るさ。互いによく見えるような配置。

- ・補聴技術

ろう：技術の可能性と限界についての認識

難聴、C I：自分の使っている技術に精通していて、よく取り扱える。技術の可能性と限界についての認識

- ・コンピュータ、ビデオ技術

すべてのグループで必要。特に手話とスウェーデン語の翻訳で使用。

- ・アイデンティティ

自己理解、自身とろう／難聴との関わりについて知識を持っている

・人生の展望

ろう：確かなコミュニケーションが自身の状況へ影響する関わりや可能性を与える。十分な手話能力が、例えば、高等教育での通訳利用などで必要。手話の使用については社会の中でますます肯定的な状況にある。

難聴：多くの難聴者が社会生活の中で手話を必要としている。同時に多くの難聴者が、手話が使えないと高等教育の中でうまくやっていけない。また多くの難聴者が聴力低下を経験。年齢が上がるにしたがって、教育の中で補聴技術のみでは困難になっていく。

C I：最年長者がまだギムナジウム段階。十分な調査研究がない。ただ我々の経験による評価は、難聴者とほぼ同じだろう。

・兄弟の手話：いずれも必要としている。

聴力レベル（裸耳聴力レベル：補聴器, C I を使わず）

	0-29dB	30-59dB	60-89dB	90dB 以上	
マニラ	2	8	41	100	
アルヴィック	18	78	33	7	(2004 年春)

アンケート調査

- ・アルヴィック、マニラの保護者に対するアンケート調査
- ・回収率：60%（173/288） アルヴィック 66%，マニラ 55%
- ・統合の場所：36%アルヴィックス，33%マニラ，29%いずれでもない
- ・32%が統合に肯定的（マニラ 40%，アルヴィック 25%）
- ・現在のままがよい：アルヴィック 40%，マニラ 37%
- ・50%の親。様々な友達を持つ必要を感じている
- ・半数の親。柔軟なグループ構成を必要と感じている（特にC I 児の親はほとんど）

見解

1, 具体的な統合案の検討

①案：変更なし。それぞれの学校が現在のまま営まれる。

- ・肯定的：競争がそれぞれの学校を活性化する，親に多様な選択肢，F(プレスクール)から 9/10 年まで一貫した教育，現在の共同事業（学習）を継続できる。
- ・否定的：少ない生徒グループでの競争は共同作業を妨げる，地理的に離れていて共同作業が困難，友達が増えない，アルヴィックに手話環境を作れない，ニーズに応じたグループ形成が困難，柔軟なグループ形成が困難，学校間で職員の取り合い。
- ・両学校の発展：アルヴィックスの教職員の手話能力の向上，それぞれ様々な専門的な知識，技術の向上が必要。
- ・見解：DHB：否定的。親/生徒：物理的に離れているので共同作業が困難。教職員：見解が分かれる。これでは生徒のニーズに対応できない。共同作業をゆっくりと進める，統合の前にお互いにもっと学ぶ必要がある。

②案：2つの学校が存続，1つの学校に2つの併行したコース。それぞれにスピーチクラス，フレキシブルクラス，手話クラスを持つ。それぞれFから9/10年生まで持つ。半数の生徒が別の学校に行く。フレキシブルクラスは，ある教科はスピーチで，別の教科は手話で。ある状況では，スピーチクラスと手話クラスが一緒に学ぶ。そのときは手話通訳が活用される。

- ・肯定的：両学校にF-9/10年生までのパースペクティブが確保できる，生徒のニーズが変わっても学校を変える必要がない，アルヴィックスでの健聴生徒との交流の可能性，ろう，難聴，聴の生徒が同じ学校にいる利点，言語によって学校を選ぶということがなくなる。

- ・否定的：地理的に離れているので、共同活動が難しい、同齡の友達が少ない、現在の生徒をどう 2 つに振り分けるか、手話環境が弱まる、ある教科の指導は両校を必要とする、マニラの生徒は健聴の友達をもてない、生徒数が少なくなるので、フレキシブルクラスが作りにくい、両校の共同事業が難しくなる。
 - ・両学校の発展：両校の建物の改築が必要、先生の専門的技術や知識の向上が必要。
 - ・見解：関連団体：現在の状況は何も変わらないと見なす。
- ③案：1つの学校（マニラ）にFから4/5年生まで、もう1つ（アルヴィック）に5/6年生から9/10年生まで。それぞれにスピーチクラス、フレキシブルクラス、手話クラスがある。
- ・肯定的：手話クラスの生徒が多くいる、アルヴィックの生徒が健聴の生徒と交流可能、同じ学校にろう、難聴、健聴の生徒がいる、親や生徒が言語のニーズから学校を変える必要がない、生徒数が多くなるので、フレキシブルクラスの形成が可能、同じ年齢グループに対してリソースの活用が可能、プレスクールが学校に直結、アルヴィックの生徒がより社会にインテグレートすることが可能。
 - ・否定的：Fから10年生までの一貫した手話環境が確保できない、マニラの生徒は健聴の生徒と交流がもてない、2つの学校が離れているので共同事業が難しい、F-9/10の一貫した指導ができにくい、年少が年長を、年長が年少を互いに見ることができない、聴力の程度が軽い子どもの親はこの選択肢を選ばないだろう。
 - ・見解：多くの関連団体がこの選択肢を希望。親、生徒を除いて、この選択肢を最善としている。インテグレーションしているプレスクール児の親は、自分の子どもをマニラに通わせたくない。職員グループも肯定的。マニラの自然環境は年少の児童に最適。
- ④案：1つの学校（アルヴィック）にFから4/5年生まで、もう1つ（マニラ）に5/6年生から9/10年生まで。それぞれにスピーチクラス、フレキシブルクラス、手話クラスがある。
- ・見解：年少時にアルヴィックにいることは、聴覚管理に有効、ただし自然が少なくない。年長でマニラにいることは、周りから隔絶、健聴生徒とも交流が難しい。
- ⑤案：1つの学校、1つの建物。スピーチクラス、フレキシブルクラス、手話クラスがある。
- ・肯定的：学校がF-9/10年まで一貫したパースペクティブを持つことができる、ろう、難聴、健聴の生徒が同じ学校、学校を変える必要がない。
 - ・否定的：競争がなくなる、選択できない、聴力損失が軽度の親はこの学校を選ばないだろう。
 - ・見解：3つのレファレンスグループともこの選択肢がベストと考えている。
- 2、ろう、難聴生徒が健聴生徒と一緒に
- ・ろう、難聴生徒と健聴生徒の交流について。難聴クラスと健聴児クラスとの取り組みはあまり見られない。調査によると、インテグレーションした難聴生徒は、場のインテグレーションのみで実質的な交流ができていない。難聴生徒が補聴技術、手話通訳、読話などを使って有効に関われるのは小集団のみ。交流には学校よりもむしろ課外活動やコミュニケーションの活動を有効に活用すべきだろう。学校での健聴生徒との交流では、両者の生徒数を同じにするなど、適切な配慮が要るだろう。
 - ・親のアンケートによると2つのグループに分かれる。ろうの生徒の親は健聴生徒との交流を特に希望しない。インテグレートしているプレスクール児の親はアルヴィックでの適切な環境で健聴生徒との交流を希望している。

最近のHPの報告文書（2007年3月）では、2011年に統合することが合意されており、上述の第5案が採択され、それに向けての具体的なロードマップも提示されつつある。新しい学校の名称も、マルヴァ学校（Malvaskolan: ManillaとAlvikを合成して作ったのだろう）となっている。生徒数も試算では300名近くになるはずだ。ただ本当にこの統合でろう児、難聴児、CI児を取り巻く課題を解

決できるのだろうか？

スウェーデンのろう学校、難聴学校を巡っていて、日本と決定的に違うところに気づかざるを得ない。1つはろう児と難聴児を明確に区別しているところだ（このあたりは先の本にも紹介している）。ろう児の中には補聴器を装着していない子どもも多い（むしろ補聴器の装着の有無で、ろう児と難聴児を区別しているところもある）。また2つにろう児と難聴児の関係については多く議論されているが、聴児との関係が教育のプログラムに上っていないところだ。日本でも近年、インテグレーションをあまり肯定的に捉えない風潮が出てきているし、世界的に見ても、例えば、サラマンカ宣言のように、ろう児、難聴児にとってのインクルージョンの意義を限定的に捉える論調が主流だ。そのような動向も背景にあるのだろう。調査報告の最後のところでも健聴の生徒との交流について書かれているが、議論に深まりはないようだ。これはアルヴィックでもカナボックスでも感じた違和感にも通じる。同じ敷地内にいる、難聴児と聴児がほとんど交流していないのだ（少なくとも、日本での交流教育のようには）。難聴学校の教師は驚くほどこれについては消極的だ。日本のようにとにかく一緒にという発想がない。する必要を感じているが、でもその前にやるべきことがたくさんある（カナボックスの副校長の言）、あるいは相当準備してやらないと返って逆効果（アルヴィックの副校長の言）など。インクルージョンと手話との関わりについては、イタリアとノルウェーでの実践の報告を待たなくてはならないだろう（次々稿の予定、乞うご期待）。

親たちの思いーフリースクール

今回の調査では統合問題をきっかけにして、親たちの思いに多く出会うことになった。そして行き着いた先が、フリースクール Nya Broskolan（ニアプロ学校）だ。ストックホルム郊外にろう児・難聴児のためのフリースクールが設立されていた。作ったのはもちろん親たちだ。親たちの思いをうかがいにこの学校を訪問した。

ホームページによると、スウェーデンではじめてのろう児、難聴児のためのバイリンガルフリースクールとのこと。2000年8月にスタートした。スウェーデンでは、1994年に「特別な支援とサービス法」が制定されて、様々なフリースクールができた。これらは正式の学校と同様の扱いがなされている。これにより親の選択肢が広がった。2004年には、近隣のギムナジウム（高等学校）との共同事業で、ろう児のためのギムナジウム（フリースクール）が立ち上がっている（4人が地域の高校に通学しながら、週何日かこのフリースクールにやってくる）。

まず校長先生（彼女はろう児の親でもある）に話をうかがった。このフリースクールはまず生徒5人でスタートしたが、現在は19人になっている。内訳は、低学年（1, 2年生）が6人、中学年（3-5年）も6人、高学年（6-10年）は7人となっている。いずれも複式学級となっている。低学年の児童は初めからこの学校に入学した。中学年のうちの2名はコミュニンの通常の学校にインテグレーションしていて、途中からこの学校に来た。高学年は4人がマニラから、1人はアルヴィックから移ってきたとのこと。先生は全部で10名程度（パートタイムも含め）。ろうの先生もいる。生徒のろう、難聴の割合はと聞くと、ろう、難聴、CI児がおおよそ3分の1ずつだとのこと。

この学校の設立の経緯をうかがう。基本的には親の選択肢を増やしたかったとのこと。今スウェーデンでは、フリースクールなど親の学校の選択肢を増やす方向に行っているらしい。健聴であれば、例えば、英語のフリースクールとかフランス語のフリースクールとかがある。この学校は手話のフリースクールだとのこと。例えば、英語のフリースクールは英語で指導されているが、それ以外は普通の学校と同じ。この学校も手話で指導されているが、「普通」の学校。校長先生は、「普通」を強調されていた。アルヴィック難聴学校は普通の学校だが、手話環境が十分でない。マニラは特別学校で「普通」の学校ではないという。どこが違うのかと聞くと、10年制であること、カリキュラムが違う、

また居住している地域との交流ができない、地域から孤立しているなどなど。自分の子どもが幼稚園に通っているとき、親たちが集まっていつも話題にしていたのは学校選択のことだった。アルヴィックにするのか、マニラにするのかを選択しなくてはならない。アルヴィックは手話がない、でもマニラは「特別」の学校。親たちは手話を使う「普通」の学校が欲しいという思いが常にあった。それがこの学校を設立する大きな動機になった。親たちは、あくまでも地元のコミュニティに所属した学校に子どもたちを行かせたいと言う。また親には学校を選択する権利があるとも言う。

ここ5年間のスウェーデンのろう教育の変化について校長先生にも話をうかがった。全般的にはいい方向に行っている。この学校はある意味で時代を先取りしている。またこの学校の今の状況を固定的に考えたくない。常に発展していきたいと言う。また常にオープンでありたいと言う。手話とスピーチの関係は？とうかがうと、自然に使っている。もちろんろう児と難聴児がいるときは、手話を使うが、難聴児同士、また先生と難聴児と個別的に話すときは声だけで話すこともある。彼らの第一言語はスウェーデン語。それも大切に考えたいと思っている。

少し授業の見学をさせてもらった。高学年クラスは、ろうの生徒が多かった。手話がしっかりと使われていて、スピーチはほとんどなかった。マニラろう学校で1年生のときから見ていた2人の7年生もこのクラスにいた。またギムナジウムに通っている2名も加わっていた。みんな日本にとっても関心があるとのこと。急遽、日本に関しての勉強になった。日本に関してたくさんの質問があった。みんな好奇心を持ち、しっかりと質問し、能力的にも十分発達している印象を受けた。何枚か写真も取られた。今日の勉強をもとに学校のホームページに日本からの訪問者というテーマで学習の成果をアップするとのことだった。

昼は、向かいにある地域のギムナジウムのカフェテリアで生徒と一緒に昼食を取った。昼はいつもここでとるとのこと。学校同士で契約をしているのだ。こんなふうにならぬ身近にあるいろんなリソースを活用する体制ができています。

中学年クラスは、難聴児が多かった。手話を使うが、声もよくでている。2人の教師が指導していたが、うち1人の先生が、生徒に近くで、スウェーデン語の口話通訳をしていた。手話が十分に使えない生徒がいるのだ。同時に手話をよく使う生徒もいる。このクラスでも日本のことについていろんな質問がでた。ただ生徒同士で話されていることがなかなか共有されていないような印象を受ける。先生も一生懸命、生徒同士の橋渡しをしようとする。声から手話、手話から声へと。ただやはりクラスのメンバーに十分な共通のことばがないのでなかなか集団活動が難しいのではと印象を受ける。ろうの先生の授業であれば、また状況は異なるのだろう。

日本にもフリースクールの活動が活発になっていると校長に話をすると、是非とも日本のフリースクールと交流をしたいとのことだった。この学校は、実はギリシャやイタリアなどのフリースクールとも交流があり、民間団体の助成を受けて、生徒が相互に訪問を行っている（EUの国々の中でフリースクールのネットワークが出来上がっている）。ろう児難聴児たちは、どの学校に所属しようとも、（時には国を越え）互いにつながっている、そんなことを感じながら学校を後にした。

次稿では、主に読み書きについての調査報告を取り上げたい。スウェーデンのろう学校に関わる心理士たちがろう児や難聴児の読み書きの調査を行っている。その調査結果を紹介したい。またストックホルム大学の先生が、急増するC I 児の成長を追いかけている。彼らの家族や友達同士、学校の中のコミュニケーションの状況について報告している。これについても紹介する予定だ。

(つづく)